

かざ

ぐるま

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2026 春号

112

公益財団法人 和歌山県文化財センター



特集
三郷八幡神社本殿の保存修理工事

特集 三郷八幡神社本殿の保存修理工事

1. 神社と本殿の概要、 保存修理事業

海南市下津町黒田に所在する三郷八幡神社は、国道42号線沿いの山腹に境内を構えます。室町時代中期に現在地に遷座したと伝わり、現在は黒田・丁・丸田の3地区（＝三郷）の鎮守社です。

その本殿は、柱間が3間で、大輓和気神（応神天皇）を主祭神として住吉明神、菅原道真公の3柱が各間に祀られています。流造と称する屋根は檜皮葺きで、木部は彫刻や彩色で鮮やかな外観を見せています。棟札から、永禄2年（1559）に建立されたことや、昭和戦前までは21年ごとの遷座が執り行われてきたことが知られ、室町時代末期の再建から20回以上の修理が繰り返されてきていると考えられます。

本殿は昭和19年（1944）に旧国宝（同25年からは重要文化財）に指定され、同35年（1960）度には解体修理が行われまし

た。その修理の際に確認された墨書から、江戸時代の後半に2度の大がかりな修理を受けてきたことが明らかとなりました。一度目は安永4年（1775）9月から翌5年3月までの7か月間をかけて、軒まわりや縁まわりの修理が行われました。二度目は文政6年（1823）正月から4月までの4か月間で、背面の軒まわりや軸組・小屋組の補修が行われました。

和歌山県内には、廣八幡宮（広川町）、輓洲八幡神社（紀の川市）、野上八幡宮（紀美野町）など、中世期の八幡社も複数存在するなかで、当社の社殿は小規模ですが、彫刻には繊細かつ特徴的な表現がみられます。墓股と称する部材内の彫刻においては、正面中央（主祭神を祀る空間の上方）に「大黒天（神）」を表現します。大黒天の脇に置かれた二股大根は八の字形に表現されています。南側面（正面向かって右側）の墓股の内側には「西王母の桃」を題材とした彫刻、北側面（正面向かって左側）の脇障子には「諫鼓鶏」の彫刻など

を配しています（写真20～22）。

昭和35年度の解体修理後、平成3年度に檜皮屋根が葺き替えられ、また、同11～12年には防災設備工事を行って維持管理を続けてきましたが、屋根面が再び傷み出し、昭和修理から60年以上が経過した彩色や単色塗装も全体に劣化が進んでいたため、国・県・市の補助を受けて令和6～7年度の2カ年事業で、本殿の屋根葺替修理と塗装・彩色の修理、棟まわりの補修などの工事を行い、昨秋に竣工を迎えました。

本誌では、修理工事の経過を紹介するとともに、修理中に確認できた内容も一部紹介したいと思います。



写真1 本殿の全景（竣工時、南西から見る）

2. 保存修理工事について

工事は屋根工事と塗装・彩色工事の2本立てで行いました。素屋根の建設、彩色部の保護、屋根檜皮の解体、彩色部の調査、屋根の葺き直し、棟まわりの補修、単色塗装の塗り替え、彩色部の補修と描き直し、素屋根の解体の順に進めていきました（写真3～19）。

彩色部の調査は、昭和35年度の施工（描き直し）の再現を目的としましたが、保護作業中に江戸時代や再建当初に近い時期の彩色痕跡が複数確認できて、現在は赤や白に塗られた箇所にも彩色の存在が判りました（写真2）。そこで単色塗装の前に追加の調査を行い、その内容を記録することになりました。



写真2 旧状の彩色痕跡（向拝柱の後面）

右は自然光、左は斜光にて撮影。現在は赤く塗られた後面にも前・側面と同様に彩色が存在していたことが判りました。



写真4 屋根面の劣化状況（南西から）



写真3 塗装・彩色の劣化状況（正面見上げ）



写真6 屋根面の解体（南西から）



写真5 彩色部の保護（浮いた塗膜を定着させる）



写真8 軒付・野地の復旧（南西から）



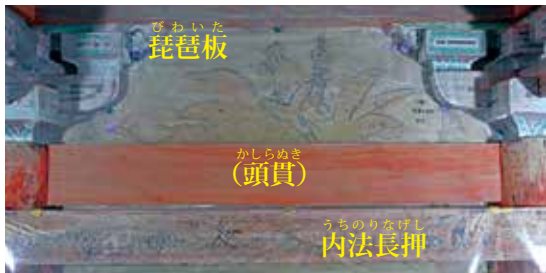
写真7 彩色部の調査状況（正面中央付近）



写真10 棟まわりの補修状況（銅板の巻き直し）



写真9 屋根面の復旧状況（南西から見上げる）



塗膜除去後、旧彩色と記録図（現在は白く塗られる琵琶板、赤く塗られる内法長押には草花の彩色が描かれる。頭貫は昭和修理時の新材。）

写真12 旧状彩色痕跡の調査の一例（身舎背面、内法長押と琵琶板）



現状彩色と調査図（龍の胴部は波で隠される）



塗膜除去後、旧状彩色と記録図（龍の胴部にはウロコも描かれている）

写真11 旧状彩色痕跡の調査の一例（向拝頭貫）



写真14 彩色部の描き直し（身舎、南西から）



写真13 単色塗装の塗り替え（向拝、南西から）



写真16 彩色部の補修（欠落した箇所を描き足す）



写真15 彩色部の描き直し（向拝頭貫・墓股）



写真 18 修理後の塗装・彩色（正面見上げ）



写真 17 素屋根解体中（南西から見る）



写真 20 正面中央間の臺股彫刻「大黒天（神）」



写真 19 修理後の塗装・彩色（北東から見上げる）



写真 22 南側面の臺股彫刻「西王母の桃」



写真 21 北側脇障子の欄間彫刻「諫鼓鶏」

（画題の解説：西王母とは、道教における最上位の女神です。崑崙山^{こんろんざん}を統治し、後に不老不死の桃園を管理する天上の王母とされます。場面は、三千年に一度実を付ける桃を、東方朔^{とうほうしやく}が盗もうと伺っているところです。その悪事により現世へと流された東方朔は、やがて漢^{ぼてい}の武帝の重臣となり、武帝が不死の薬（西王母の仙桃）を求めた際、7月7日の訪問を取り持った、とも伝わります。後に『七夕』や『西遊記』の伝説とも結び付けられていく人物です。当時の日本への伝わり方やこの画題を選んだこと等を想像すると面白そうです。）

今回の修理工事は「昭和修理の継承」という位置付けで実施しましたが、彩色痕跡などから当時の施工内容の把握をよりめざすことになりました。そして、450年以上ある歴史のうち記録が残らない前半部分の様相にも迫れそうな情報が得られ、建物が内包する情報の奥深さを実感することになりました。事業の終盤には、地元住民を対象とした現場見学会が開催され、より身近な文化財となつて貰えるよう、本殿が有する建築的な魅力などの紹介に努めました。

（下津 健太郎）



中世の土壙墓から出土した 鉄製短刀の保存処理

令和6～7年度にかけて発掘調査を行った日高郡日高川町佐井に所在する大芝遺跡（調査内容については風車109号、111号を参照）では、古代末から中世の遺構面で多数の土壙墓を検出しました。これらの土壙墓群からは副葬品とみられるような遺物はほとんど出土していませんが、土壙墓381からは、鉄製短刀が

一振りと繊維製品の破片が出土しました。しかし、出土時直後の短刀は全体が錆に覆われており、非常にもろい状態でした（写真1）。

土中から出土した鉄製品は、そのまま放置すると土中に含まれる塩分や酸化作用により錆が進行し、風化と相まってやがて元の形状を保てなくなり得ます。このままでは貴重な資料を後世に残すことができないため、保存処理を実施することになりました。

保存処理の第1段階として、まず入念な洗



写真1 出土した状態の鉄製短刀



写真2 クリーニング作業（錆び取り）



写真3 鉄製短刀のX線写真



写真4 脱塩・樹脂による補強が終了した状態

浄とX線撮影を行って、短刀そのものの状態を確認しつつ、表面を覆っている錆を除去します（写真2）。この際、土壙墓381から2点出土していた鉄製品が接合し、ほぼ完全な形になることがわかったほか、茎部分の目釘穴も残っていることが明らかになりました（写真3）。また、この鉄製短刀は鞘や柄にあたる部分の木質が一部残っていたため、どのような木材なのか分析するためのサンプルを目立たない位置から取得しました。第2段階として、鉄製品中の脱塩処理を行います。これにより、ようやく錆の進行を止めることができます。第3段階として、短刀に樹脂を全体に染み込ませて、補強や破片の接合を行います（写真3）。今回の保存処理ではこれらの作業に10か月程度かかることが見込まれており、専門的な薬品や施設が必要になることから、外部機関に作業を委託して実施しています。

令和8年3月には保存処理が完了した鉄製短刀が戻ってくる予定です。今後「紀州のあゆみ」展などで、皆様に見ていただく機会を設けたいと考えています。

（濱崎 範子）

陸奥宗光は、和歌山出身の明治期の外交官・政治家です。外務大臣として米国や英国などと結ばれていた不平等条約の改正を大きく前進させ、日清戦争の講和（下関条約）では全権を務め、日本の国際的地位を押し上げました。鋭い判断と交渉力から「カミソリ大臣」と呼ばれました。

陸奥宗光の生家である紀州藩士伊達家の屋敷の一部を移築したと伝えられる建物が、郭家住宅にあります。紀州藩の御典医であった郭家が、和歌山城下に建てた自宅兼民間医院で、令和6年8月に重要文化財に指定されました。郭百輔氏が明治10年に建てた洋館で有名ですが、その奥にある座敷が宗光ゆかりとされる建物で、自在な造りと稀少な素材を用いた煎茶席の趣が強い数寄屋造りです。



郭家住宅 座敷 九畳の間

筆者は登録文化財の手続きに何度か訪れました。応対してくれた当時の所有者（百輔氏のひ孫にあたる女性）が「子供の頃は座敷に入れてもらえなかったんですよ。」と話してくれました。郭家では一番大切な部屋であったことがその言葉から容易に想像できます。この時ご高齢の婦人は話をしながらレギュラーコーヒーを淹れてくれました。そのコーヒーは本当においしく30年たった今でも忘れることができます。

これから郭家住宅は保存や活用の計画が立てられ、修理が行われると思いますが、この家を大切に守り伝えてきたご婦人の想いが損なわれることがないことを切に願っています。修理の終わった建物で、ご婦人を思い出しながらおいしいコーヒーを味わいたいです。

（寺本 就一）

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

年賀状じまいをする方が増えてきましたが、今年は「午」年ということで年賀状に馬形埴輪を題材にした考古学関係者も多かったのではないのでしょうか。そこで、干支の動物と考古学にまつわる話をしたいと思います。干支の動物の中には考古学で取り扱う出土品によく出てくるものほとんど出てこないものがあります。よく出てくる筆頭は今年の干支であるウマで、あとに続くのはトリやイヌ、イノシシになります。トリは弥生時代の鳥形木製品や古墳時代の鳥形埴輪などでみられ、イノシシは弥生時代の土器に描かれることがあり、埴輪として作られることもあります。イヌも埴輪として作られています。日本にいないトラやリュウ、ヒツジはほとんど見ることとはなく（リュウは例外的に弥生土器に描かれたり、壁画古墳に描かれた青竜などもあります）、現在、日本に生息しているネズミやウシ、ウサギ、ヘビ、サルもほとんど出てきません（銅鐸に描かれたヘビであったり、ウシやサルの埴輪もありますが稀な例です）。一番多く出てくるウマについては、弥生時代までは日本列島にはいないとされており、古墳時代以降に持ち込まれましたので、弥生時代以前には表現されることはありません。古墳時代には古墳に立ち並べられた馬形埴輪や祭祀用とされる滑石製模造品の中に馬形がみられます。奈良時代になると祭祀用の木製の馬形や土製の馬形（土馬）がみられるようになります。江戸時代には土人形の一種として馬形が作られたりもします（土人形にはトリやイヌも出てきます）。このように干支の動物の中ではウマが多く扱われていることがわかります。特に祭祀の場面で扱われることが多く、ウマはそれだけ身近でありながら、霊力を感じる存在だったのでしょう。

最後に午年の年賀状でありがちなフレーズで締めたいと思います。「皆様の一年が万事ウマくいきますように。」

（仲原 知之）

催し物案内

和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2026年冬～2026年春)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 令和7年度末(2026年3月31日)をもって、紀伊風土記の丘資料館は一時休館し、令和10年(2028)和歌山県立考古民俗博物館(仮称)としてリニューアルオープンします。

和歌山県立博物館

- 改修工事のため休館 ～2026年7月

和歌山市立博物館

- 企画展「うつりかわる和歌の浦」 2026年4月25日(土)～6月21日(日)

- コーナー展示「紀州藩士の兜」 2026年2月3日(火)～4月5日(日)
「紀州おさかな図鑑—和歌山の本草学—」 2026年4月7日(火)～5月31日(日)
「大谷古墳と紀ノ川北岸の古墳」 2026年6月2日(火)～8月2日(日)
(常設展示室内のテーマ展示です)

- 特集展示「作家・有吉佐和子 紀の川・華岡青洲の妻」 2026年4月～7月

※掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙 三郷八幡神社本殿 竣工状況(上:正面、下:側面軒下)
- 2 特集「三郷八幡神社本殿の保存修理工事」
- 6 短信「中世の土壙墓から出土した鉄製短刀の保存処理」
- 7 きのかに歴史小話「文化財建造物課 陸奥宗光と郭家住宅」
「埋蔵文化財課 千支の動物と考古学にまつわる話」
- 8 催し物案内

風車112 (2026・春号)

令和8年3月31日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp/>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】〒640-8301 和歌山市岩橋1263 番地の1
TEL 073-472-3710 FAX 073-474-2270
E-mail kanri-2@wabunse.or.jp



ホームページ



YouTube



WABUNSE_OFFICIAL
Instagram